

文知摺観音からの電話

2025.11.27

11月の1週目だった。幼稚園に電話がきた。主任の先生が出た。どうやら私への電話らしい。

「文知摺観音からお電話です」文知摺観音？すぐに2つのことが頭をよぎった。

11月1日の福島民友新聞「随想」コーナーに、「文知摺観音」というタイトルでエッセイを掲載したばかりだった。そこには、百人一首などの知識について書かれた内容があった。もしや、間違いがあったのか。いや、そもそも何の了解も得ずに、勝手に文知摺観音のことを書いたのがまずかったのか。すぐに危機管理意識が働いた。

電話をかわった。「文知摺観音の入り口にある普門院の○○です。失礼ですが、民友新聞の文章を書かれた方ですか」「そうです」「突然すいません。感激してしまいました。あんなふうに書いていただけたなんて、本当にありがとうございます」

どうやら、いいほうの電話だった。「いえいえ、こちらこそ感激しています。わざわざお電話をいただけたとは、うれしいです。どこかまちがっているところはなかったでしょうか」書いた内容に間違いはなかったらしい。

もう何度も随想を書いているが、このようなことは初めてだった。改めて、新聞の力には驚かされた。そもそも、当事者である文知摺観音の方が、民友新聞をお読みになることを想定していなかった。

「もうまもなく文知摺観音のモミジが真っ赤になる頃ですか」「今週が靈山で、うちは来週ですね」なるほど。そうなのか。そういえば、以前行ったときも、11月の2週目くらいだった。今度行ったときには、普門院にお邪魔してお礼を言おうと思う。

毎年、桜の時期も、紅葉の時期にも、何かしらのエピソードが生まれる。今年の紅葉では、今回のエピソードに恵まれた。文章を書いていると、何かにぶつかることがある。それは、人との出会いであったり、書籍の中の言葉だったりする。とにかく前に進んでいれば、何かが起こる。そんな気がする。それは、きっと自分の人生を豊かにしているのだと思う。ありがたいことである。

思いがけない文知摺観音様からのお電話により、幸せな気分になれた。同時に、身の引き締まる思いがした。自分の文章を多くの方が読んでくださっている。そう思うと、今まで以上に練りに練った文章を書いていかなければならない。

まもなく11月が終わる。今年の紅葉シーズンも終わりを告げる。これからは本格的な冬へと向かうことになる。冬は冬で、また何かがあるような気がする。とにかく前に進んでいこうと思う。